

給料の話

この不況下（バブルがはじけてから）、公務員の給料は高すぎるから、3割カットせえ、などという政治家もでるし、新聞にも載る。そんな無茶な話はない。バブル景気の時、公務員の給料はなかなか上がらず、証券会社など、ボーナス袋を投げたら立った、など、景気のいい話が聞こえていた。それでも、「公務員は安月給で可哀想だから、給料を上げてやれ」などと言った人はいないし、順調な会社では、たとえばオロナミンCの大塚製薬など、ボーナスが15か月分だった、という。あとで、倒産しそうになったけどな。・・・その後、バブルがはじけて、日本中が一気に冷えこんで、倒産の嵐。ひどいのが住友をはじめとする大銀行。大蔵省を脅して、国民の預金がゼロになってもいいのか。オレたちを倒産させると、そうになってしまうぞ。で税金で助けてもろといて、ぼろ儲けしよる。利息はいつでも上げへんのに政治献金しよか、やて・・・一般の人は「公務員はいいわねえ、ボーナスもでて。」と嫌味を、家族に言わせる。

一般の企業で話すと給料が高い企業と安い企業があり、それは業績によって決定される。そのかわり、倒産の危険性は、いつでもある。

民間の会社では、常に倒産の危険性があるのだから、つぶれることのない公務員よりも高くてもいいのである。危険手当です。ただし、夕張市みたいな状況になったら悲惨やけど。・・・大阪府や大阪市の職員も、既得権利ばかりゆうて胡坐をかいて左うちわでいられるのもいつまでかわかれへんで。

給料というのは、自分が上がって他人は据え置き、というのが楽しいのであって、全員が上がるのなら意味がない。ましてや能力給なんか、もつてのほかである。みんな同じ給料なら、できる人は不満だが、できない人もなぜか不満。なぜかという、アホウは自分以外は、みんなアホウと思っているから。誰が判定するのか、という問題も発生する。

2-6-2の法則で、はじめの2はともかく、あとの2は、仕事をしているようできて、実は、みんなの邪魔をしている。それでも、自分がおらんと、この会社は成り立っていないと思っているから、困るのです。だから、上の半分で仕事をした方が効率的なのであるが、雇ったかぎりは仕事をさせないといけないから、おだてたり、すかしたりして、なんとか形をつくる。（医者の世界ではこれこれこんなんですワ、と言ったら、ある人がどこの世界でもおんなじでんな。いっそ出勤してくれないほうが、仕事全体の効率があがる。できない人の粗っぽい仕事を手なおしすることによって、余計な手間がかかるからである。いや、ホンマ。）

たとえば新聞は、府議会議員たちが議会で公務員の給料を決定することが定められているのだが、このとき、当然ながら議員の給料も上がる。すると、「お手盛り」といかに正義の味方ヅラして大きく取り上げる。そうかなあ。「公務員の給料をあげてやるためには、議会の承認が必要なのである。自分たちの給料をあげるために議会があるのではないのと

違う？ 結果的に自分たちの給料も上がる」だけの話ではないか。

それなら聞くけど、新聞社の給料はどうなっているの？ やっぱり、会社で決めるのやろ？ それなら、「会社ぐるみ」で自分たちの給料をあげているのではないか。これは「お手盛り」とは言わないのでしょうか。新聞という公器を使って、自分たちの月給があがることを正当化する。・・・どう考えても理屈に合わないような気がします。

つまり「充分満足な給料」や「適正な給料」というのは、実は、存在しないのである。必ず、どこかから不平・不満がでるものです。